

## 小児の年齢区分を考慮した臨床参考範囲の設定

○市川 萌美,田中 伸久,長井 綾子,中村 雄策(群馬県立小児医療センター)

### 【目的】

小児では自覚症状が不明瞭なことから、検査所見から得られる情報は貴重であり、その基準範囲は、成人以上に重要と考えられる。しかし、小児における基準範囲は未だ確立されておらず、設定もほぼ不可能な状況にある。当院では、現実的対応として基準範囲に準じる「臨床参考範囲」を設定し活用を図ってきた。ただし、年齢区分を項目にかかわらず一律3区分としたことにより、問題も残されていた。今回、臨床参考範囲の年齢区分を項目毎により適切な区分に変更し、再計算して改良を図った。

### 【方法】

「日本人小児の臨床検査基準値」（小児基準値研究班，1997）を用い、生化学的項目を対象に、各年齢区分における基準範囲の上限，下限が $\pm 5\%$ に収まる年齢群を同一区分にまとめた。新たに設定した年齢区分で、臨床参考範囲を求めた。計算には基準範囲計算プログラム MCP-STAT Ver.6（シスメックス）を用いた。

### 【結果と考察】

小児の基準範囲（臨床参考範囲）は、成長に伴う変化が大きいことから、年齢の細分化が必要とされる。今回、特に成長に伴う変動が大きい総ビリルビンや無機リン等では、年齢区分の細分化によって、臨床参考範囲は妥当なものに改良された。ただし、年齢区分は、なるべく簡単で少ない方が使いやすい。そこで、年齢区分の変更を必要最低限にとどめた改訂を検討中である。

(連絡先 0279-52-3551)